

編集後記

『木簡研究』も本号でもう第五号となりました。もう早くも五号というものが、編集部一同の実感です。そのような実感をいだくのも、やはり五という区切りの数字のためではないかと思います。創刊号・第二号のころは、まだ紙面のスタイルや編集の手順が充分に固まつておらず、いわば手さぐりでともかくも作りあげたという感が深かったのですが、その後試行錯誤をくりかえし、不十分とはいえる点はようやく固まってきたように思われます。しかし、内容・形式の安定化とともに、他方で、やはり新機軸も織り込んで、紙面を一層充実させていくことも大切かと存じます。

第四号で、佐藤宗諱氏に漆紙文書についての出土情報をまとめていただき、昨年度大会の秋田城跡出土漆紙文書の報告につづいて、今年度の大会で鹿の子C遺跡出土の漆紙文書について御報告いただけたなど、木簡学会として漆紙文書をとりあげるようになつたのは、その一つの現れといえましょう。漆紙文書については、前号以降、たとえば下野国府跡その他各地で出土が報ぜられています。本号では、これらをまとめることはいたしませんでしたが、次号以降に、掲載の形式なども考慮し、一層充実した形で御報告できるよう努力していきたいと思います。

また、本号では『草戸千軒——木簡』についての書評を水藤真

氏にお願いしました。本誌でははじめての書評で、これも新しい試みの一つです、今後も、木簡関係文献の書評・紹介を企画していくたいと思います。

小林芳規氏の御論文は、昨年度の大会報告にもとづく力作で、前号の小谷論文について、国語学の分野からの仕事を掲載できましたことは、木簡研究の幅のひろがりを示すものと言えましょう。また田中琢氏の一文は、今年度大会当日の木簡データベースの検索実演とともに、木簡研究の新段階をつげるものといえるのではないで

しょうか。

一方、本号について、皆様におわび申し上げねばならないことがあります。「概要」でも記しておきましたように、「一九八二年出土の木簡」のうち、報告を掲載できなかつたものが幾つか出来てしましました。種々の事情によるとはいえ、ひとえに編集部の責任と深く反省しております。これらの分につきましては、次号に掲載でありますよう、今後とも十分努力を重ねたく存じます。

なお、これと関連して、昨年度大会席上、当方で把握していかなかった木簡の出土例を御教示いただきまして感謝いたしております。出土例の増加とともに、その情報を十分にキャッチできないことがあり、そのことが会誌編集にも影響を及ぼしています。会員の皆様の周辺で出土情報がございましたら、木簡学会まで御一報いただければ幸いです。

大会まで一ヶ月弱となりました。委員・幹事一同、大会当日までに刊行できるよう頑張りたいと思います。
（柴原永遠男）